

拓く

研究者

26

圧縮や配信、検索などデジタル技術の進展は音楽のあり方を大きく変えた。毎年生み出されている膨大な量の楽曲すべてがデジタル化される勢いだ。こうした音楽があふれている現状とどう向き合えばいいのか。産業技術総合研究所情報技術研究部門の後藤真孝首席研究員は量ではなく、より能動的に楽しめる状況への

変化を目指している。「真のデジタル化は量の増大だけではない。今後10年は質の変化が起きていく」と指摘する。

音楽は複数の音が相互に関係しながら時間的な構造を形成して内容を伝えている。情報処理技術の急速な発展により、こうした複雑な構造の理解も進むようになった。後藤首席研究員の

産業技術総合研究所情報技術研究部門首席研究員 後藤真孝氏 43歳

音楽をデジタル構造・可視化

これまでの研究では、ポピュラー曲が一番盛り上がるさび、ユーライ音楽のメロディ、ビートなどをコンピュータ



ーが解析し、自動で音楽を構造化・可視化して「音楽地図」を作る技術を開発している。

この技術は、歌詞のテキストと同期して、歌詞の任意の部分から再生したりする斬新な技術を実現してきた。

結果、現在は解析楽曲が70万曲以上になった。また、自動解析の誤りをユーザーに訂正してもらうことで、システムと人間がうまく力を合わせ、より発展できる社会を目指す意図もある。一連の音楽の情報処理技術の開発が評価され、2013年度の日本学術振興会賞や日本学士院学術奨励賞を受賞した。

また、最近の研究ではネット上に存在する膨大な楽曲の自身を自動解析して音楽地図を作り、コード進行検索などができるサービス「Songle（ソングル）」を開発した。「より直接的に能動的な音楽鑑賞を楽しんで欲しい」と一般公開し、実証実験を続けていく。ユーザーなど動画共有サイトにも対応した

「Songle（ソングル）」を開発した。「より直接的に能動的な音楽鑑賞を楽しんで欲しい」と一般公開し、実証実験を続けていく。ユーザーなど動画共有サイトにも対応した

以来、音楽情報処理の研究に一貫して取り組んでおり、この分野のパイオニアと言える存在になった。今もさまざまなアイデアを駆使し、多様な人材や企業と交流しながら「未来の音楽の楽しみ方」を作り上げている。

（毎週水曜日に掲載）